

名の索引が付されているから、文字通り慧能全集であつて遺漏するものがない。なお、以上のそれぞれの文献資料には研究班諸氏の解説補注が付せられている。それぞれの文献・資料についての解説補注は、現段階における最新の学術的成果を踏まえたものであつて、研究者を資益するところ大きい。

以上紹介したように、本書は慧能に関する資料の蒐集および解説として完璧といふべきものであるが、ただ本書を研究篇、資料篇と分ける編成方式については問題がなくもなからう。本書の資料篇の序には、「右のような本篇の編成に対して、先の『研究篇』にも多くの原資料を含み、一方、『資料篇』中にも研究的な内容を付載するという矛盾に対する批判が存するかも知れない」と述べて、これに対し弁明を試みているが、慧能の伝記資料は研究篇に収め、思想文献は資料篇に収める、という分けかたはたしかにおかしい。もし本書が題するように、『慧能研究』であれば、資料は柳田氏の『初期禅宗史書の研究』(昭和四二年、法蔵館)のように終尾に一括して収載すべきであらうし、慧能に関する全資料の蒐集・解説であれば、本書は『慧能全集』または『慧能資料集成』という題名がふさわ

しいであらう。しかし、また本書がそのような不整合に気づきながら、敢て『慧能研究』と題したところに、現時点における仏教学界の研究趨勢が示されているとも言える。伝記についての研究は比較的容易であり、また進んでいるが、思想についての研究は容易ではなく、また一向進んでいないからである。その意味で、本書は『慧能研究』と題しても、思想面においては慧能に関する資料を研究者に公正に公開したものであつて、慧能の思想研究は研究者各人の今後にまかせたものと言

田島柏堂著

『瑩山』(日本の禅語録五)

書評という場合、多くは問題点なり欠点に対する批判或いは要望が伴うものである。勿論そのような配慮も必要であらうが、ここではそのようなことに触れることなく、専ら紹介のみを主としたい。

曹洞宗の両祖のうち、太祖は高祖に比してとりあげられ方が尠い。しかし尠いながらも

えよう。

しかし、これだけの立派な成果を生み出した研究班である。これでおしまいということではいかにも惜しい。さらに引き続いて研究を継続され、慧能の思想研究から進んで中国禅研究の上ですぐれた業績を挙げられることを願うものである。

(大修館書店、昭和五十三年三月、二五、〇〇円、B5版、図版十六頁、序・目次十二頁、本文六五七頁、索引、英文梗概二十四頁)

光地 英学

近年は比較的太祖関係の出版物が出るようになった。太祖降誕七百年(昭和四十二年)記念として、以前のものに新たに洞谷開山瑩山和尚之法語と教授戒文とを編入して大本山総持寺より「常済大師全集」が再刊され、同太祖六百五十回忌記念(昭和四十九年)として同本山より「伝光録白字弁」の再刊、「常済

大師研究」の出版があったこと。同記念として若干の瑩山禪師研究号の雑誌のあったことが銘記せられる。これより以前に単行本としては、安谷白雲老師の「伝光録独語」(昭和三十一年)、永久岳水博士の「伝光録物語」(昭和四十年)が公刊されていることも看過されてはならない。また大遠忌の昭和四十九年に新進気鋭の篤学者佐橋法竜師の「瑩山が世に出された。同じく東隆真教授の「瑩山禪師の研究」(昭和四十九年)が、瑩山禪師に関する諸発表を代表する態において注目と讃弁を博したことは周知のことであろう。

この度出版界の雄、講談社から日本の禅語録廿巻が刊行されている。その語録五として瑩山禪師がとりあげられていることは、禪師が識者らに注目されてきたこととして注意されてよい。いうまでもなく瑩山その人というよりは、語録であるから、禪師の代表作伝光録についてのものであることは首肯されて余りない。伝光録に関してはかの無隠師が伝光録序において「弁麗にして理正しく、眼活にして道深し。即ち永平高祖の正法眼蔵と相表裏するものなり」としている如く、高祖の正法眼蔵に対して姉妹関係にある宗門としての二大宝典である。太祖にはなお信心銘拈提・

坐禅用心記・三根坐禅説・瑩山清規・十種勅問・洞谷記等のものがあるけれども、伝光録はこれらのうち、最も早く(三十三歳)成立したものであるとともに、代表作であることは贅言の要もない。

さて今回の田島柏堂博士の「瑩山」に注目しよう。巻首に瑩山禪師像(大本山総持寺蔵)のカラー写真が掲載、折角のところやや不鮮明の感のあるのが惜しまれる。次いで瑩山の尊名下に、「伝統と創造の世界に生きた禅匠」の見出しを付しているのは、伝統承受と個性発揮の点、禪師に対する正当の言であろう。

このことを著者は「はじめに」の見出しのところで要言し切言している。次に番号一として瑩山禪師の世界を、面授嗣法の宗教・真意義、超師の機とは、伝統と創造の世界の各項目類別のもとに、次に二として禪師の生涯、三として禪師の人間像を著者発見の「禅林雅頌集」収載の「洞谷開山和尚示寂祭文」における明峰・峨山・珍山の三資のものによって説述、四として禪師の思想を、男女平等、女人救済思想を中心として略述している。最後に五として伝光録についてを、伝光録の組織・内容・性格、最古写本の発見と真撰の傍証、現代語訳から各国語訳へ、という小項を

以て纏めている。第五についてみるに、伝光録の性格を「伝光録白字弁」などにより、正伝の仏法の曹洞禅史的意義を明示、且つ高祖二祖章の伝記史的価値をも昂揚、真偽考証については乾坤院本、珠膺書写本などを基として伝光録の真撰性を強調、さらに伝光録の現代語訳、各国語訳という将来への希念を以て結んでいる。

本文の現代語訳は、現在二十余種にも上る異本中、最古写本のものとして著者発見の乾坤院本(愛知県知多郡東浦町緒川乾坤院蔵、一四三〇〜五九写)を底本とし、上中下三段組とし、上段に原文(原文は片仮名であるが平仮名とし、多少の訂正も施す)、中段に現代語訳、下段に必要語句の略註を施している。原文、訳文の要語にルビも付されている。このあとに補註として、各章術語の詳解、綿密な出典考証をなしている。次いで原文に関する註として、原文字句の異同を、竜門寺本、長円寺本、仙英本、その他について示している。末尾に瑩山禪師略年譜、伝光録研究略年表、曹洞宗三国伝燈系譜(過去七仏から瑩山禪師直弟迄)が事項・書名索引とともに付載されている。

さて著者の田島博士は学生時代よりの真摯

な篤学者で、既往生涯を通じての無倦の研鑽が今日の大をなしたといつてよく、自他共に認める愛知学院大学、否、宗門の至宝的存在である。単独の著述と違い、叢書ものとしては期間その他の制約があることとて、少壮学者群の補佐を必要としたことは当然のことと

いわねばならない。兎に角、大学その他の要職繁忙裡、この種の内容豊かにして平易な叙述のうちにも学的香りも高い好著を公けにされた努力は、高く評価されてよいであろう。(講談社、昭和五十三年四月、A5版、一、八〇〇円、図版二頁、本文、三七四頁)

鏡島元隆著

『出山面山』(日本の禅語録十八)

小坂 機 融

を本気で意図せしめ、人生の根源に関わる宗教の問題をも科学の名の下に一掃してしまふかの如き一般的風潮を醸成していったのである。

科学にせよ宗教にせよイデオロギーにせよ、すべて人間の関わる事柄においては、本意なくも本来性を逸脱して疑似化に向う傾きをもっており、自らの現実的限界を超え、独

善に対する自戒を忘却する時、真実なものへ無情な圧力を加えてしまう恐れを常に内包している。曾って宗教の名において科学の進歩にブレーキをかけたように。しかし、本来的

にはいずれも真実への還帰であり真実の探求である以上、そのいずれの名においても他を圧殺するもので有ってはならないであろう。従つて現代の状況は、本質を逸脱して皮相に流れて抜き難い泥沼に踏み込んでいると言わざるを得ない。

現在、我々が抱えている困難な病弊は、科学技術・政治・経済の問題として表面化しているが、しかし、これらはこの問題のみに限られたものではない。このことへの対応のみで本当の治癒を期待することはできないであろう。これは人間の根源に関わる人間の文化全体の問題であつて、部分的処置に終始したのでは、それは単に臭いものに蓋をしたにすぎない。現在の本質への掘り下げを無視する状況には、従来の迷信や魔術や偏執にもまさるとも劣らぬ奇怪なものを巣くわせる絶好の温床が造り上げられていて、現実社会の歪みに応じて病的症状を顕にしてくることにならざるを得ない。

現在、この科学技術の飽くなき進歩にも拘らず、人生の根本問題(宗教)が新しく問われなければならぬのも、ここにある筈である。今日「西洋の没落」が言われ、東洋への志向、就中禅に世界的関心が寄せられている

現代の科学文明の急速な進歩は、我々に豊富な物質や情報を、また簡便極まる使い捨ての生活を与えてくれることになったが、それにも増して我々を拘束してきた迷信を白日の下に晒し、客観的実証的究理によつて疑似のものをつつ剥き取り、我々の心奥から暗く忌まわしかった不合理な苦悩を拭い去つて行つた。而してそれは、恰も我々に科学万能を真剣に思わしめるほど急速に生長したのであつた。やがて現代社会に自然の征服(破壊)